

救いの源流

—浄土真宗の教えと本願寺—

はじめに

主に浄土真宗本願寺派の僧侶の育成を目的として設立された専門学校に、中央仏教学院があります。この学院のカリキュラムの一つである通信教育では、全国各地の多くの方々が、生活の場において多忙な時間を割いて、継続して学んでくださっています。受講生の年齢も幅広く、その立場もさまざまです。そのような方々を対象に刊行されている月報（一年に十二回発行）が『学びの友』です。したがってその掲載文は、それらの諸事情を考慮して執筆することが願われています。

近年、一年を通して毎号連続して掲載された中から、執筆者相互の了解のもとに、出版の運びとなったのが本書です。

この書をひらいて、気軽に読み進むことができないと戸惑われるかもしれません。しかし学習教材として利用されることで、これだけはしっかり押さえてほしいポイントをはずさずに、記述されています。

その内容は、

(一) 浄土真宗の基盤となる「浄土三部経」

- (二) 浄土真宗の成立と本願寺
- (三) 蓮如上人とその教学  
です。

本書の刊行にあたっては、中央仏教学院のご理解と本願寺出版社のご協力をいただきましたことに、厚く御礼申しあげます。

二〇一九（令和元）年十一月

清岡隆文

『救いの源流―浄土真宗の教えと本願寺―』 目次

はじめに..... 1

## 第一章 「浄土三部経」に学ぶ

大田利生

『仏説無量寿経』―救いの源 .....	9
『仏説観無量寿経』―人間の姿 .....	47
『仏説阿弥陀経』―難信の法 .....	66

## 第二章 浄土真宗の成立と本願寺

岡村喜史

親鸞聖人の伝道 .....	89
墳墓の造営と移転 .....	102
大谷廟堂から大谷影堂へ―留守職の成立 .....	115
大谷影堂から本願寺へ―本願寺基礎の確立 .....	138

## 第三章 蓮如上人の生涯とその教え

清岡隆文

蓮如上人のご事跡 .....	157
伝統からの学び .....	187
蓮如教学の特徴 .....	199
おわりに（刊行にあたって） .....	221

\*聖教の引用については、  
『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』  
『浄土真宗聖典（七祖篇）註釈版』は『註釈版聖典（七祖篇）』  
と略記しています。

# 第一章 「浄土三部経」に学ぶ

大田利生

## 『仏説無量寿経』―救いの源

### 説法の会座

第一章では、浄土真宗の根本経典である「浄土三部経」の概略について学んでいきましょう。

経典を学ぶ際にいつもこころに浮かぶことばは、善導大師の『観経疏』序分じよぶんの文です。そこには、

経教きやうきやうはこれを喩たとふるに鏡かがみのごとし。しばしば読よみしばしば尋たずぬれば、智慧ちえを開発かいほつす。  
(『註釈版聖典(七祖篇)』三八七頁)

と示されます。経典とそこに説き明かされる教えがちょうど鏡に喩えられ、鏡に自らの姿を映すように、経典を何度も読みながら深いこころを身をもって尋ねて

いくならば、やがて智慧の世界が開かれていくと、このようにうかがわれます。短いことばですが、大切に時折想い出しながら、読み進めていきたいと思えます。さて「浄土三部経」ですが、最初から一まとまりとして成立したものではありません。「浄土三部経」という呼称は法然聖人ほうねんしょうにんによつてはじめてなされ、親鸞聖人もそれを受け継がれます。阿弥陀仏を讃ずる経典は多いのですが、もっぱら阿弥陀仏と浄土に関して説かれる経典は、三部経以外にはありません。「浄土三部経」とはよく知られているように、『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』ききょうです。このうち、『仏説無量寿経』（以下、『無量寿経』あるいは『大経』と略記）についてその内容を尋ねながら、味わっていくことから始めたいと思います。

さて経典の冒頭には、共通して「我聞如是」がもんによぜからはじまる常套句じょうとうくがおかれます。この「我聞如是」（われ聞きたてまつりき、かくのごとく。『註釈版聖典』三頁）は、他の漢訳による異本によつては「如是我聞」とするものもあり、細かい問題もありますが、いまはそれをひかえることにします。いずれにしても「私はこのよう

に聞かせていただいた」という最初のことは、阿難あなんが釈尊の説法に対する聞と信をあらわす重要な意味をもつものです。続いて、説法の時・場所が示され、説法される釈尊とそれを聞く聴衆が登場されます。いわゆる「六事成就」という場面が整うことになります。とくに、大比丘衆だいびくしゆ万二千人を前に説法されたとあり、そこに三十一人の尊者と十八人の菩薩が列記されています。有名な五比丘をはじめ十八弟子など、著名な僧団のリーダー的な人物が揃い、続いて多くの菩薩たちが集っておられます。

このように、あらゆる弟子、菩薩を聴衆とされていることは、聞き手に簡えんびがないということだといえます。換言すれば、すべての聴衆を受け入れるということだといえましょう。

ところで、それら菩薩たちは、

みな普賢ふげん大士だいたしの徳とくに遵したがへり。

（『註釈版聖典』四頁）